日赤看会誌　J Jpn Red Cross Soc Nurs Sci Vol.11, No.2, pp.33-41, 2011

第11回日本赤十字看護学会学術集会

特　別　講　演

古いは新しい、新しいは古い
フロレンス・ナイチンゲールの品格

What's New about Florence Nightingale
～A Woman of Noble Dignity～

小玉香津子　Kazuko Kodama　　（聖母大学）

キイワード：フロレンス・ナイチンゲール再考、品格、徳目
key words：Florence Nightingale Revisited，dignity，virtues

はじめに

この演題をいただくやいなや、頭をよぎったのは流行語を使うのは品が悪いという戒めだったが、考えてみれば、「フロレンス・ナイチンゲールの品格とはどのようなものか」はナイチンゲール研究における真っ当な研究疑問である。彼女を看護学の系統図の天辺に置き、看護学の近い起源がそこにあるとして今日の看護を問う、といった仕事をしてきながら私は、これだけがナイチンゲール研究ではないだろうと頭の隅で思っていた。彼女という人物研究の看護学的意味を考えあぐねていたのである。この演題はそうした日々に溜め込んでファイルしてあった４つのノートを想起させ、これらを芋づるの手元としてひとつ考えをまとめてみようか、とあいなった。流行語であることなどどうでもよい、“品格”はナイチンゲール研究の鍵概念であるはずだ。

ノートの１つは英国のデレク・セレマンという看護教員の論文「看護婦の道徳教育における徳目－フロレンス・ナイチンゲール再考－」（セレマン，1997）である。看護学生の徳目を育てることには歴史があり、ナイチンゲールが信じ、かつ大事にしていた人格の徳目、アリストテレス的なるもの、がそこに深く関り、ナイチンゲール自身における、またナイチンゲールの看護におけるそれら徳目の意味を問う、という研究疑問にこの論文は気づかせてくれた。２つは、長年手元にある日本赤十字社の『看護婦・生徒　修身教授参考書』（日本赤十字社，1910）である。明治43年、ナイチンゲールのなくなった1910年、に編まれた手掌サイズのこれを私は“修身の手帳”と呼んで折にふれぱらぱらしてきた。日赤中央病院看護婦監督、追っては看護部長であられた飯塚スヅ先生に頂戴したのだ。これにミス・ナイチンゲールの登場が目立ち、そこに語られた彼女の身の修め方につき分析の要ありとのよれよれの付箋と書き込みの数々、芋づるの手元になろう。３つは、聖トマス病院のナースと見習生達への彼女の語りかけ、『ナイチンゲール書簡集』（ナイチンゲール，1872-1900）に馴染んできた日々の読書ノート、とでも呼ぼうか。『書簡集』が徳目あるいは品格をめぐる彼女の“覚え書”とも読めること、彼女はそれを自分の問題として書いていること、に目を止めてきたノートである。“私はこれを人のためにというよりも自分に向かって話しているのです”“これは私自身に言いきかせているのですが”“私は改めようとしているのです”などの書き抜きがある。そして４つ、100年続く看護雑誌「アメリカン・ジャーナル・オブ・ナーシング」の最初の50年分600冊からのメモのひと束は、ミス・ナイチンゲールが20世紀前半、まさに品格の人と称えられていたことを語る。ICNが最初の倫理綱領を固める（1853）までは彼女がそれであったのだ。

そうこうするうちに芋づるはおのずからのように手繰られてくる。では話の糸口はどこに、と思う間無しに、この話におつきあいいただく方々にはまず彼女に会ってもらわねばなるまい、と気付く。

ミス・ナイチンゲールの肖像

写真①

大嫌いではあったがお嬢様の嗜みとされていた刺繍をするフロレンスと書物を手にした姉のパスィノープ。この広く出回っている絵葉書には、1836年フロレンス16歳、とあるがクックによる伝記（クック, 1914）のF.N.肖像一覧には1839年フロレンス19歳、社交界デビュー、との注があり、衣装やポーズからしてそれらしく思える。ある研究者は“この年齢ですでに彼女は自分を見つめる視線から目をそむけている”と書く（Bostridge, 2008）。“伏し目がちであるべきだ”とする彼女の心の姿勢はこのころにもう定まりつつあったのだ。

lorence Nightingale at thirty, Photographed in Berlin on her way back from Egypt.

写真②

1850年、エジプト・ギリシャ旅行の帰途、ベルリンで撮った写真。この旅の間に彼女は30歳になり、志をほぼ固めたのではないか。かねて思いを寄せていたライン河畔のカイゼルスヴェルト学園に２週間滞在し、頼まれてそこの奉仕女子訓練の紹介冊子を書く。伏し目である。

写真③

1854年、フロレンス34歳。前年からロンドンはハーレー街の“婦人家庭教師のための療養所”の看護監督になっていた。これはナイチンゲール家の人々が最も満足していたフロレンス像、家族にとってかくあってほしい優雅な佇まい。

写真④

1856年、フロレンス36歳。４月にクリミア戦争終結で８月に帰国した彼女がヴィクトリア女王の注文に応じて撮った写真。もっとも多く世に出回っている彼女の像。

写真⑤

翌1857年、37歳。執筆、調査、面会などの多用に母や姉との絶え間ない衝突もあって疲労困憊の彼女はこの頃実際倒れる。家族はこの写真が実物に最も近いと言っていた。働きづめで疲れ果て怖い顔のフロレンスを家族は嫌ったが、これが実像だろう。

One of a series of photographs taken of Florence Nightingale, probably (to judge by the length of her hair) in 1857. These pictures were widely distributed as cartes de visite.

写真⑥

⑤と同年。同じ服、同じ背景（エンブリーパークの屋内）の写真が何枚かあり、同じ消耗状態のフロレンスながら家族はこの全身像を気に入っていた。

写真⑦

５年前に発見された1858年、38歳の写真。『病院覚え書』を出版し、翌59年末の『看護覚え書』の仕上げをしていたであろう頃である。故郷の１つのロムジイの町の名士写真集に入っていたこの彼女、細く、尖っている。戦後の彼女は意気揚々にほど遠く、ある理由で深く沈んでいた。

Florence Nightingale in her bedroom at South Street, circa 1887.

写真⑧

1887年頃、60代の終り近く。“えもいわれぬ平和な雰囲気を漂わせていたが未だに周囲から恐れられる存在であり、”（ウーダム=スミス，1950）。５、６年後にシカゴ博覧会（1893）で「病人の看護と健康を守る看護」を発表するのだから、まだ現役である。特別注

文のバッキンガムシャー製レースをまとう。この10年後に彼女を訪ねた津田梅子は記す、“冴えた心眼、活々とした容姿は80の老婦人とは思えない”“聡い輝いた顔”（吉川利一，1990）。

写真⑨

亡くなる数年前の肖像画はいずれも穏やかでしかし鋭く、優しさに力強さが重なり、フロレンス・ナイチンゲール老いてなお、である。

彼女は美しい

真、善、美、は多数決では決められず人それぞれの判断するところであるが、フロレンス・ナイチンゲールは美しい、には衆目の一致がみられるのではないか。エドワード・クックもウーダム=スミスもルーシー・セイマーも、それぞれが物した彼女の伝記に彼女は並はずれて美しかったと記す。ナイチンゲール家のサロンの常客であった小説家のギャスケル夫人によれば“フロレンスは背の高い、姿勢のよい、ほっそりとした人。たっぷりとした栗色の髪、透き通るような肌、灰色の瞳、その瞳は想い深げに伏し目がち。しかし、その目が快活に輝くと・・・・白い歯のこぼれる笑顔は実に愛らしい”（クック，1913）。19世紀アメリカの博愛主義者として知られるサムエル･ハウの妻で詩人、婦人参政権運動者だったジュリア・ハウは“美しい、品のよい方・・・優しく、顔付きは活き活きとしていて表情に富んでいた”（セイマー，1950）と。看護史家のルーシー・セイマーは、フロレンスのどの肖像画をみてもまず目につく特徴はその広く高い額であり、この額のために顔全体が理智と気品にあふれてすばらしくみえる、とも書く。加えて彼女の声が誰彼によって讃えられる。とくに英国ではその人の品性が声で判断されるようだ。やわらかく澄んだ声、あるいは低い声、と伝えられる。

この美しい人は粗野や横柄さとは無縁である。一昔前までの日本女性にも粗野や横柄さは目立たなかったと思われるが、アメリカ女性にはそれがある、とは犬養道子氏の弁であり私も思い当たる節がある。それ故か、アメリカのナース達はフロレンスの美しさ・品格に打たれた。20世紀の前半を通じて、フロレンス・ナイチンゲールが自分達ナースの品格と看護という職業の品格を高めてくれた、と感謝していた気配がある。看護の科学性を証明する道を開いたことによってではなく、美しさ・品格によって彼女はナース達の希望の星であった。20世紀後半、看護学が問われるようになるとアメリカのナース達は前半と同じ感覚でフロレンスを看護学の系統図の頂に、とびきり毛並のよい金色のサルででもあるかのように飾る。彼らは荒っぽい。

そう、フロレンスは美しい。見目麗しく、姿よく、優雅に振舞う。身につけるものは上質を好み、上質のものを使う――これも品格の要素である。もっとも着るものの好みは“野の花”だった。聖トマス病院のレディの見習生に聖書を引いて服装のあり方を説いているのは彼女自身がそういう装い方をしていたからだろう。『書簡集』のそのくだりに彼女の知的な美のセンスが高く香る。いわく“野の花の中に決して八重咲きの花はありません。八重咲きの花というのは、その大切な雄蕊を派手な花弁に変えて咲くものなので、種が実らないのです。こうした八重咲きの花は、近頃よくある衣装の無用の付属物のようなもので、やたらと邪魔になるだけです。野の花はその美しさの中にも目的をもっているのです。服装もそれと同じで、目的のないものは身に着けないことです。・・・野の花はその色彩に完全な調和があり、しかもその色数も多くはありません。それに野の花は汚れた土の中に育ちながら、その清らかさにはしみひとつありません・・・”（ナイチンゲール，1876，書簡５）。

上質を好み、野の花のセンスで装う、これで“美しい”に気品が加わる。実は、センスなどという言葉では表しきれない彼女の内面が、彼女のただならぬ美しさを創っている。内面とは、彼女の品格の要素として以後順次取り出していきたい、強い感受性、圧倒的な知性、克己心、誠実、などである。赤十字のあの“修身の手帳”は徳目の最後に“容儀”（礼儀に適った身のこなし、容貌）をあげ、その尊ぶべきは内心の美しきにあり、衣服の良し悪し、容貌の美醜は人の人たる価値に何ら損益するところなし、と説く。しかし、顔立ち、美しい姿や動作は品行の彩りとして大事であり、他者によい感じを与える力をもつゆえに整えよ、と。しかし、とまた苦しげにしかしを使って、外観をただ飾っても駄目で内心を磨け、と。

美しいということが品格の要件の１つであることは確かなようで、フロレンス・ナイチンゲールは美しいのである。彼女の母親が自分達の思い通りにならない娘フロレンスのある種異常ぶりに、自分達は知らない

で白鳥の卵を孵したアヒルの気分だ、とこぼしたが、あの皮肉屋のリトン・ストレイチは、何が白鳥だ、あれは鷲だ、と書いた（ストレイチ，1950）。美しい白鳥が、伏し目がちだとはいえ鷲のような鋭い眼、勇猛な攻撃力など白鳥らしからぬ性質を合わせもっていた、ということになる。そうした内面も彼女の並々ならぬ美しさ、品格に与っている気配については後述したい。

彼女は感じとる力がひときわ強い

物事を感じとる力が強い、あるいは感じとる能力が高い、これが彼女の品格に大きく与っていると思われる。“美しい”彼女の“内面”の第１はこれだろう。ウーダム=スミスは“異常なほどの敏感さ”と書く。ダービシャーの屋敷近くの農民小屋を訪ねたフロレンス22歳の手記――“私の心は人々の苦しみを想うと真っ暗になり、それが四六時中、前から後ろから私につきまとって離れない。・・・私にはもう他のことは何も考えられない。詩人達がうたい上げるこの世の栄光も私にはすべて偽りとしか思えない。目にうつる人々は皆、不安や貧困や病気にむしばまれている”（ウーダム・スミス，1950）。

彼女は他者の苦しみに痛めつけられた。共感などというものではない、痛めつけられたのだ。“自分の中から出て他の人の思いの中に入っていく”（パウロ）フロレンス。やがて彼女は自分の使命がこの世の悲惨な人々の中にあると悟り、追い追い看護なる使命を意識する。他者の苦しみに痛めつけられ打ちのめされる彼女の感じとりは、自分達が贅沢三昧を捨てさえすれば救える悲惨がこの世にあふれているというのに・・・というところまで煮つまり、ついに行動に出る。今日我々の回りにも“悲惨”はあふれているが、それを感じとって痛めつけられ打ちのめされまでする者はなかなかいない。恐ろしいほどの他者志向である。他者志向、己を殺して他者に生きる、が最上の道徳であるとするオーギュスト・コントの哲学を信奉するフロレンスがかくして出来上がった。

クリミア戦争のさ中スクタリの病院でナース達の間に宗派争いが激しくなり、病気の兵士達の取合いに及んだとき、将校や医師や従軍牧師の間で“ミス・ナイチンゲーは何派か”という話になり、スコットランドからきていた牧師の“あの方はよきサマリア人派です”に一同納得する一幕があった。よきサマリア人――よき隣人ともいう。１昨年だったかノーベル文学賞を受けた英国の作家ドリス・レッシングの小説、『夕映えの道』と訳されているが原題は『よき隣人の日記』（レッシング，1983）の主人公は、自分第一主義者とみなされても当然の威勢のよい御洒落なキャリアウーマン。ふとしたことから独り居の老女の世話をする羽目に陥り、周囲からボランティア組織“善き隣り人”のメンバーになったのかとみなされることに反発しながらいつの間にか老女の日々に巻き込まれ、手を貸し、ふと、自分の生きる姿勢が変わっていく気持ちよさを覚える。『ルカによる福音書』にあるイエスの喩え ―― 路上に倒れ苦しんでいる人が目に入った時、他の名立たる者達のように避けて向こう側を通ることをしないでまっすぐその人のところへ行き、助けたサマリア人、すなわちその人にとっての真の隣り人。今日では多少揶揄されながらもかくあることがクリスチャンの基本的な行動目標であることに変わりはない。小説の主人公は行きつ戻りつしながらも揶揄を躱し、恥ずかしながらの善き隣り人になるのだが、それは自分の弱さを知らされ、それを乗り越えた結果であり、フロレンスも実は克己あっての“避けて向こう側を通らない”であった。

感じとる力が強い、ゆえに他者志向、すなわち善きサマリア人、なる人に品格をもたらす大事な要素を、赤十字の“修身の手帳”は“仁慈”として掲げる。“すなわち儒教に老いて仁といい、仏教において慈悲といい、キリスト教において隣人の愛というもの、帰するところーなり”。そして孔子を引いて、それは一口でいえば他を思いやることだ、と。次いで、仁慈の心あって初めて勇気、すなわち断じて実行する力が出てくるのであって、として、クリミア戦争時のナイチンゲール嬢の身を殺して仁を成すさまをあげ、仁を発揮するときには必ず理性の導くところが必要だ、と“他を思いやる”が行動となるとき（勇気が必要となるとき）、概念的な思考の力（理性）あるいは頭脳の知的な働きが伴わなければならないこと、さもなくば“他を思いやる”はただの感情で終わってしまうこと、を諭す。

フロレンスの感じとる力の強さ、他者をまず思う気持ち、は勇気を出すに十分なほど強かったから行動として発揮され、彼女の品格の心棒となる。ここにはナイチンゲール家がユニテリアン派であったことが与っていよう。プロテスタントの一派であるユニテリアン派は、宗教は他者の利益のための行動にかかわるべきであるとし、信仰を行動で示すことを強調する。彼女は宗派にこだわらなかったが、つまり、人をしばしば無神経（感じる力がにぶい）にするような強すぎる信仰の持ち主ではなかったが、ユニテリアン派の思想は幼時から身に染み込んでいただろう。彼女の感じとる力の強さ､そこに勇気が伴って他者志向の行動に出る、そのように生きる、は彼女の信仰に根ざしている。彼女は修道女の精神を養っていた。自分で定めた厳格な規律のもとで修行を積んだ人だった。彼女の品格には修道女の品格がある、と思う。

克己の人、フロレンス

赤十字のあの“修身の手帳”は、ナースが品位を保つために欠くべからざる要件の１つに克己自制をあげ、先の仁慈をはじめその他の徳を養うためにも克己が必要、と説く。それは「確固たる意思をもって正しからざる感情および欲望を制する力」だと教える。フロレンス・ナイチンゲールの克己は圧倒的である。

フロレンス17歳から19歳にかけての１年半に及ぶナイチンゲール家のヨーロッパ大陸旅行を彼女は徹底的に楽しみ、パリなどの社交界で評判を取る。上辺だけを飾る、快く楽しいだけの日々に実際溺れる。しかし、目覚める。“社交界で輝き渡りたい”という誘惑を乗り越えねばならない、これが私フロレンスの一番の課題だ、と手帳に書く。目覚めた彼女は、神が17歳の彼女に命じた“神の仕事”とは何であるかを必死で探る。5年ほどに渡るその探りの日々でも、病人の看護がそれだと思い知ってからの更なる10年ほどの間にも、家族の妨害と闘い、すなわち自分と闘い、安易安逸を退けて筋金入りとなった。実は、人生の己惚れ（彼女の表現）を求める自分と容易には別れられず、そういう自分を責めた。集団の中で注目の的になっていないと気のすまないところのある自分、そういう人生の己惚れを彼女は退けた。彼女の姉はこの人生の己惚れに浸り切っていた感があるが、ある伝記作家はその姉パスィノープはもうひとりのフロレンスだったと言う（Gill，2004）。フロレンス・ナイチンゲールは自分の内に巣くう虚偽と対決して何とか勝った。“悪しき己れに対する善き己れの戦い”に自分を奮い立たせて何とか勝ったのである。後後仕事の上でも彼女は自分を奮い立たせて安易さに流されず、事を成す。スクタリから本国政府筋にあてた手紙の一節――“私は慣例というものには従わず・・・ただその仕事に最も益となるにはどうすればよいかという判断により、自分自身を奮い立たせているのです”（コープ，1958）。

慣例といえば、ヴィクトリア時代の女性にとっては結婚もそれで、彼女が心ゆるがせた求婚もあったがそれを断ったときの自分の奮い立たせ様は――曰く、私の中の情熱的な感情傾向（性質）は彼との結婚で満たされるだろう。私の中の知的な素質傾向も彼との結婚によって満たされるだろう。しかし私には満たされずにはいられない倫理行動的な素質傾向がある。それは彼との生活の中では満たされまい。それを満たさない生活は精神的自殺だ（クック，ウーダムスミス，セイマー，ストレイチ）。

この克己の人は自分を統率することができ、かつ自分を何かに見せかけようとあがいたりせずに“ありたい姿”に“ある”ように努める人だった。晩年聖トマス病院のナース達にそう説いている。彼女は本当の自分とかくありたい自分との距離が極めて短い人だった。５しか６しか持っていない自分を８か９持っているように見せる人では断じてなかった。これは品格の要件である。彼女の美しさを格別のものとした彼女の内面の大きな場所を、あの感じとる力の強さとともに克己、己の内の抑え難いものを努力して抑える、が占めていた。ここには強いストレスがあったに違いないが、ストレスに対処することができる、感情的にではなく問題解決的に対処することができる力も品格の要素である。

克己はフロレンス・ナイチンゲールを重圧感のある怖い人にしたと思う。ひとにおもねることなく、自分を保持していく上で妥協をしない人は怖い人である。怖くて、しかしあの仁慈に満ちた彼女、品格は単純とは程遠い。

克己の人は独り立つ人、“倚りかからず”の人。思えばこの詩人、茨木のり子も美しい。フロレンスに通じるところがあると写真に見入ったことがある。“倚りかからず”は品格の要件と言ってよく、フロレンスは“倚りかからず”の人だった。

高い知性、確かな力量

品格がある、は知性がある、だろう。賢さと才能が知性の柱だろうが、教養も欠くわけにはいかない。フロレンスの教養の程は、ごく普通に伝え聞くところだけでも我々を驚かせる。そこここから取り込んだ知識ではない、学問の単なる蓄積でもない、それこそ彼女の人柄（品格と言ってもよい）の中に積っていったもの、そういう教養がある。そこには嗜みの見事さも含まれる。彼女は名をあげてからもその行動は慎ましかった。

そうした教養を内包した彼女の知性、これこそが彼女を、大仕事を為し遂げた彼女たらしめたのではないだろうか。彼女の知性が彼女の力量の根源であろう。“私達は知ったこと、分かったことをどうやって実践に移すのでしょうか。頭を使うのです”と彼女（ナイチンゲール，1884，書簡10）。故に頭の訓練が大事だと彼女はナース達に言う。彼女は頭の訓練をした。自分の知性を徹底的に育てた。31歳でカイゼルスヴェルト学園に見習い生として入るとき提出した“私はこれまでどんなふうに生きてきたか、その道程”といった観のある経歴書に書いている――父親のいわゆる教養人教育を受けていた10歳からの７年間ほどのことを“この間私はひたすら自分の知性を育むことに没頭した。人間の知性が努力を積むことによりどのようなものになるだろうかと考えると、野心がむらむらと湧いてきた”（ナイチンゲール，1851）。

鍛えた結果の卓越した知性、頭脳によってあの、例えば『看護覚え書き』にみられるような、現象の奥に潜む原理に目を届かせる力、事の処し方、を彼女は自

分のものとした。クックの言う“理詰めの理論家”ができ上がった。そのような彼女が、己を無にして高邁な使命のために働いたのだから、その存在感というか風格のほどはいかばかりだったか。彼女の周辺の人々、特に錚々たる男性が彼女に奉仕したのはうべなるかな、品格はそれをそれと判る人を圧倒するのである。高い知性も間違って使うくらいならないほうがよい、とジェーン・オースチンは作中『エマ』の人物に言わせているが、因みにフロレンスはシェイクスピアに次いでオースチンを評価していたそうだが、フロレンスは自分の知性を正しく使った。自らの動機を問いつつ知性を使ったのだ。高邁な使命に、倫理の物差しを持ち出す以前に知性の物差しを持って取り組んだ。

高い知性に根ざした力量には、戦略力、ときに策略と言ってもよいようなものを使う力が含まれる。彼女のストラテジック・リーダーぶり（小玉，1986）と知性に根ざした力量とにはそういう側面があること、を我々は納得させられる。最初の“職場”であるハーレー街の病院である案件を通すために、医局には理事会は承認したと言い、理事会には医局は承認したと言い、両者を騙して成功した、と父親に得々として書き送る彼女には苦笑させられるばかりだが、人事の陰謀のようなこともしたようだ。また、陸軍大臣のパンミュア卿、彼女に言わせれば“妬み深くて私（フロレンス）の意見を取り入れたと思われたくない男”（コープ，1958）とのある遣り取りの１つ１つに、これは私の勝ち、これも私の勝ち、これは私の負け、あの人の勝ち、とメモを残している彼女。彼女は自分で言っている通り、“自分の銃を打てる”人だった。

フロレンスは勝れた頭で戦略を考えつき、成功させたわけだが、思うに、父への自慢にしろ勝ち負けのメモにしろそこにいつもユーモアの気の立つことが、戦略あるいは策略あるいは陰謀も力量のうち、と我々に思わせるのだろう。知性が、それに根差す力量が品格を作りあげるとき、このユーモアの気は大事である。彼女にはそれがあった。茶目っ気があった。

しかし、あの、クリミア以来彼女の力量に圧倒されたかのように彼女の意のままに働いたサザランド博士に、“驕り高ぶる者は神から離れる”と言われてしまう場面もあった（コープ，1958）。彼女の品格が曇ることもあったようだ。

頭のよさと力量があるという自信、そこからくる驕り高ぶりともとられかねない彼女の強さの現れの１つであろうと思われるのが、赤十字思想についての発言である。医療奉仕の中立を唱えるデュナンの思想を、オペラの合唱のようなもの、ヒューマニティを宣言するだけのもの、歌うだけのもの、と（コープ，1958）。オペラのテーマを高らかに歌う合唱は聴衆を圧倒するが、確かにそれだけのものだろう。私フロレンスの思想はそのように甘くはない、それとこれとの違いが分かるか、と品格を危うくする気配である。

誠の人

赤十字の“修身の手帳”は仁慈に次いで第２に誠実をあげ、誠を持って人を動かした例としてミス・ナイチンゲール、ランプを持つレディをあげる。“誠は天の道なり”とそこにもあるが、漱石が作中の人物に“人の道にあらず”とまんざらふざけるでもなく付け加えさせているように、誠の人であることは難しい。彼女は誠の人、誠実だった。ごまかさない人、正直だった。聖トマス病院のナースたちに、つまり自分自身に言い聞かせている――“すべて高貴な精神の持主は誠実で自然で謙虚です”（ナイチンゲール，1876，書簡５）。自然と謙虚は誠実の要素であろう。

フロレンスの品格を揺るぎないものとする誠実・正直をもっともよく伝える事実が比較的最近直接的に明示された。経営コンサルタントの実務を通して得た分析方法で歴史研究をしているというヒュー・スモールが、フロレンスの２つの手紙を根拠に、彼女はスクタリにいた間は衛生の問題の重要性の核心を掴んでいなかったこと、戦後の“スクタリの事実分析”、統計学者のファーが中心となって実施したスクタリにおける衛生委員会の仕事の検証、によってはじめてそれを掴み、今日我々が言うところの“生活と衛生の改善”という彼女の方法を見つけたのであること、を指摘したのである。この指摘に続けてスモールは、彼女の、もっと早くこれが分かっていればスクタリの病院のあの40パーセントを越える死亡率は防ぐことができたのに、という後悔の苦悩がクリミア後の彼女を病人にした、との解釈を示す。

２つの手紙、その１は、フロレンスが1854年11月早々にスクタリに着いてから10ヶ月後の1855年８月、あのパンミュア、フロレンスの意見を取り入れたと思われたくない男、にあてたもの。この冬（1854-55）クリミア半島から黒海を越えて送られてきた兵士達が亡くなったのは瀕死の状態になってから送られてきたからであり、いま（1855年８月、衛生委員会による改革の後）では手遅れにならないうちに送られてくるので彼らは死ぬことなく、回復している、と。兵士達はスクタリに送られてきた時点で手遅れだったから亡くなった、と彼女が考えていたことが分かる。

その２は、先の手紙の１年半後、衛生委員会とは別に、物資補給に関する査問をクリミア半島で行った査問委員会のメンバー、医師であり行政官のマクニールにあてたもの。曰く――スクタリの惨事の原因は、換気の不足、排水の不備、不潔、入院生活を楽にする品々の不足、過密状態であると迷うことなく申し上げる・・・スクタリではクリミア半島におけるよりもほぼ25パーセントも多くの兵士を死なせてしまった。そ

して、病気はおもに建物そのものの中から発生したのだった（スモール，1998）。

気づいた彼女は過ちの告白すなわち事実公開を主張するが周囲が許さず、しつこく抵抗するも主張は叶わず、あげく、引き籠もり、失神、などに至った。そうした中で物した1858年の『病院覚え書き』の通奏低音は自分の失敗例であった、とみることができる。よく知られたその書き出し、“病院がそなえているべき第１の必要条件は、病院は病人に害を与えないことである”は彼女の自責の念の迸りか。翌1859年末の『看護覚え書き』もこの延長線上に生まれたのだが、スモールはそこまでは書いていない。彼は彼女の看護を探っているわけではないからである。しかし我々には分かる。

自分は気づかなかった、見てとれなかった、という過ちを告白し事実公開を主張したフロレンス、それがうまく運ばず身体症状が募るほど苦しんだ彼女、これが誠の人でなくて何であろう。彼女の生涯のそこここに誠実という品格は見て取れるが、スモールのこの指摘あるいは発見には一般向けの説得力がある。一昨の2008年、ＢＢＣは　またまたドラマ“フロレンス・ナイチンゲール”を作った。このたびのドラマのポイントは、①彼女の間違った思い込みとその根拠（手紙その１）、②彼女の新たな気づきとその時期（手紙その２）、③彼女の受けた打撃と罪の意識と病気、④彼女の事実公開の戦略とその失敗、⑤以上が浮かび上がらせる彼女の誠実、正直、でありスモールの研究結果がそれであったが、ＢＢＣは彼の著作には全く言及しておらず、スモールは抗議した。と、ＢＢＣは、自分達は今回独自に調査を進めその結果を使ったのだ、と主張、両者の言い争いがタイムズ紙上に暴露される。このバトルはどうやら、ＢＢＣがインターネットで資料を入手したと言い張り、ブロガーの書いたものを取り入れたことを認め、ブロガーがスモールの本を使ったかもしれないではないかと差出口もあり、そもそもインターネットは資料かという論争に移行、わやわやのうちに両者は和解したようだ。それはともかく、スモールの本による以上にこのドラマによって、人々はミス・ナイチンゲールの誠実という徳性に思いをめぐらすことになったのではないだろうか。亡くなって100年もたってドラマが彼女の徳性を浮き彫りにし、つまり、それを意図して国営放送のドラマが作られ、人々はまた新たに彼女を知り、新たに心動かされた。

おわりに

問わずもがなであると知りつつその人の品格を問うことを試み、強い感受性、克己自制、知性に基づく力量、揺るぎない誠実、これらが漲る美しい人、ミス・ナイチンゲールとかなり真近に出会った。改めて思うに、我々は彼女の為し遂げた仕事、とくに彼女の発見した看護、言葉にした看護と、いま会ってきたような“彼女という人”とが、渾然一体であることを忘れがちではないだろうか。

ところが、彼女が自分に負わせ、あるいは課し、当時のナース達、ばかりでなく以来今日までのナース達にも陰に陽に負わせ、あるいは課した徳目の数々、いま取り出した彼女の品格の要素がそれであるが、それらに加えて従順、献身、忠誠などは、一専門としての看護の発展を阻んでいるとの見解が20世紀後半には声高に言われる。前半までは、徳性を備えた尊敬に値する彼女、延いてはそのような女性、が看護の仕事に入ってくることにより看護は教養ある女性の職業となることができると思う向きが主流であったにもかかわらず、である。とくに従順、献身、忠誠などは時代遅れであると否定される。一方で、ミス・ナイチンゲールが身に備えた徳目をめぐっては一向に研究がされないできた。あげく、20世紀後半の看護学の“華”と呼んでもよいだろういわゆる看護理論（看護の概念枠組）の開発においては、徳目はせいぜいよくて“自明の理”としてパスされたのである。

人は、ナースももちろん例外ではなく、常に新しいものを追い求めるのでいわゆる看護理論の開発もなされるが、その新しいものを生み出そうとするにあたりフロレンス・ナイチンゲールの看護（言葉になっている）は必要不可欠な古いものであるからして、看護理論開発学者達は当然それを使う。彼女の看護が必ず新しくなる古いものであることを知っているからである。しかしナイチンゲールその人（言葉になっていない）も看護における新しいものを生み出すにあたり必要不可欠な古い人であることに、看護理論開発学者は、いや我々看護を問う者はなかなか思い及ばない。ナイチンゲールその人が必ず新しくなる古い人であることにはなかなか気づかない。ナイチンゲールその人、それはただ今会ってみての通り、徳目を生きた品格の人、であった。

という次第で私は、ナイチンゲールその人をも組み込んでの“ナイチンゲールの看護再考”（言葉にする）に後れ馳せながら踏み出そうと思う。刺激的な演題を下さった第11回日本赤十字看護学会学術集会に感謝。

文献

Bostridge, Mark（2008）. Florence Nightingale, The Woman and her Legend, London：Viking, an imprint of Penguin Books.

Cook, Sir Edward T.（1913）／中村妙子，友枝久美子（1993～1994），ナイティンゲール〔その生涯と思想〕Ⅰ～Ⅲ，東京：時空出版.

Cope, Zachary（1958）／小池明子，田村真（1979），ナイチンゲールと医師たち，東京：日本看護協会

出版会.
Gill, Gillian（2004）. Nightingales, New York：The Random House Publishing Group.
小玉香津子（1986）. ストラテジック・リーダー，ナイチンゲール. ライフサイエンス，10月，28-31
Lessing, Doris（1983）／篠田綾子（2003）. 夕映えの道――よき隣人の日記，東京：集英社.
Nightingale, Florence（1851）／鳥海美恵子（1978）. フロレンス･ナイチンゲールの経歴書，総合看護，１号，56-61.
Nightingale, Florence（1859・1863）／小玉香津子他（1974）. 病院覚え書き（ナイチンゲール著作集第２巻所収），東京：現代社.
Nightingale, Florence(1872･1890)／湯槇ます他（1977）. 看護師と見習生への書簡（ナイチンゲール著作集第３巻所収），東京：現代社.
日本赤十字社（1910）. 看護婦・生徒修身教授参考書，東京：博愛発行所
Sellman, Derk（1997）／小玉香津子（1998）. 看護婦の道徳教育における徳目. 総合看護，33（1）, 3-11.
Seymer, L.R.（1950）／湯槇ます（1965）. フロレンス・ナイチンゲール，東京：メヂカルフレンド社.
Strachey, Ritton（1921）／日高直矢（1950）. ヴィクトリア時代の秀れた人々，東京：福村書店.
Woodham-Smith, Cecil（1950）／武山満智子，小南吉彦（1981）. フロレンス・ナイチンゲールの生涯，東京：現代社.
吉川利一（1990）. 津田梅子，東京：中央公論社.

＊本稿の電子媒体化にご尽力をいただきました北里大学看護学部の出口禎子教授に感謝申し上げます（編集委員長）